

2014. 2. 15

No.181

編集・発行人 樋口みな子

E-mail

minakoginga@gmail.com

(連絡用)

URL <http://www13.plala.or.jp/minginga/>

郵便振替「銀河通信」

02740-7-56535

(郵送6号分1,000円)



## 立春を過ぎたとはいえ寒い日が続きますね



1.6 我が家のナナカマド

2014年の年が開けて早1ヶ月が過ぎました。2ヶ月ぶりの通信です。読者のみなさまはお元気でお過ごしでしょうか

心が温められました。

読者からたくさんの方の年賀状を頂きました。ありがとうございました。銀河通信で年賀状も代用していますこと、お許しくださいね。

「秘密保護法と原発反対」と何人かの方から応援して頂いたり、「地域のひとたちと市民ソーラー発電事業を起業して足掛け3年、ようやく形がみえてきました。この事業が明日の日本をつくるそんな気概で取り組んでいます」という読者の年

江別は札幌のベッドタウンという存在からか、天気予報で降雪情報が流れないことが多いです。今年の降雪は例年を上回っています。でも東京の大雪には戸惑った人たちが多かったことと思います。江別は市の排雪が思うように進まず、我が家の前の道路は、車がようやく1台通過（右写真）するのがやっとの状態でした。

札幌のアパートで病気で外に出られず、老夫婦が亡くなったというニュースに胸が痛みました。私もひとり暮らしの母をどうするかで悩みました。我が家で暮らすには1階にベッドを置くスペースがないのです。多少、足が不自由なので私が食料などの買い物をして食事の支度は母がしていました。ひとりで大丈夫という母を説得し、冬の間、近くの施設でお世話になり、雪が溶けたら自宅と施設を行ったり来たりすることで私も安心しました。

介護は福祉のお世話にもなりながら乗り切りたいと思います。まだ身の周りのことが出来るので、さほどの苦労はないですが、銀行や病院のつきそいなど、さまざまな用事は私がします。かつてのように自由に山に市民運動にと、時間を使うのは厳しくなりました。

それでも時間をみつけて、出来るだけ自然と親しむ機会を作りたいと思います。

先日、自宅近くの公園前を通ると、雀が何十羽と電線の上でチュンチュン鳴いていました。寒い朝、ちぢこまっていた背中が思わず伸びました。寒風に負けずに懸命に生きている姿に励まされたのです。近年、雀が少なくなって寂しいと感じていたので、何かふっと



1.23積雪が2mを超えた自宅前の道路（前日の降雪は80センチ）

賀状には勇気づけられました。心に病を抱える人たちの居場所を作る活動をしてきたクッキングハウス代表の松浦幸子さんからは「ひ

とりぼっちでつらさを抱えている人たちが笑顔を取り戻しますように。心の居場所から祈りながら活動していきます」と。私も未来の子どもたちに原発のない社会を手渡せるよう、今年も発信して

いきたいと思います。

2ヶ月に1度の「銀河通信」をお楽しみいただけたら嬉しいです。今年もよろしくお願い申し上げます。



1.3 小樽運河と鉛色の日本海

## 原発ゼロ社会への道を探る



1月25日にクリスチャンセンターで、原子力市民委員会による「原発ゼロ社会への道」を考える意見交換会が開かれ、脱原発をめざす多数の市民団体や市民

150人が参加しました。

吉岡斉市民委員会座長代理は「福島原発事故のような過酷な事故は今後も起こりうる。ドイツでは倫理的な判断で原発ゼロを決めた。日本もその道を選択するのが最善だ」と話されました。

船橋晴敏座長は「望ましい政策決定のあり方」として「国会や政府の意思決定を市民が変えていく。市民の話し合いを通して考えられた『公論』を作りあげる必要がある」と述べました。そうする具体的な方法は「市民運動、脱原発をめざす政党が議席を獲得すること」をあげ、直接的には「学習会や住民調査、住民によるメディアも必要」とまとめました。

## 武藤類子さんの福島からの報告

当日、私は急遽受付に入ったため、講演会の前半をほとんど聞けませんでした。予想の120人を大幅に超える市民が集まったため、市民委員会が用意した資料や椅子が足りなくなるなど、原発をゼロにしたいという思いが溢れる意見交換会でした。

武藤さんの発言は、当日の資料や公論形成のための中間報告、福島原発告訴団のHPなどを参考にしました。正確ではないことをご了解ください。

福島原発の重大事故と子どもの人権擁護に対し、法的な責任を追求する集団行動の重要性を強調してきた武藤類子さんは2013年10月「女性人権活動奨励賞（やより賞）」を受賞しました。

事故で6万人が家を追われ、職業を失い、家族や地域社会がバラバラにされました。原発のサイト内で職員が亡くなり、双葉病院では避難中に50人の



1. 25武藤類子さん（右から3人目）と脱原発の仲間

高齢者が亡くなりました。自殺者もいます。家畜や動物たちも命を落とし、子どもたちは外で遊べなくなりました。

山林や田畑、居住地も広大に汚染され、食べ物に放射

性物質が検出されました。人々は健康被害に怯えて暮らす人生となりました。

福島第一原発4号機で行われている初の使用済み核燃料の取り出し作業ですが、使用済み核燃料の放射線量は即死級の超高線量で、燃料プールに入っている核燃料の内、使用済み核燃料は計1331本あります。多くの専門家から「大地震に耐えられない」と指摘されています。4号機での核燃料取り出し作業は早くても来年末までは続く予定で、作業中にある程度の規模がある地震や災害が襲来してくる可能性が高いのではと懸念されます。

原子炉の亀裂から原子炉建屋内とタービン建屋に冷却水が漏れ出し、このため汚染水の増加はとどまることなく続いています。原子炉からは今も一時間に1000万ベクレルの放射性物質が大気中に放出されています。原発建屋海側の観測井戸から検出される放射性物質の濃度は、日々上がり続けています。一日3000人の作業員が高い線量の中で働いています。

あまり効果の期待できない除染で出た膨大な放射性の廃棄物は、黒や青い色のフレコンバッグに詰め込まれ、耕作出来ない田んぼに積み上げられ、あるいは家の敷地の中に置かれたり、庭に埋められたりしています。フレコンバッグに放射線の測定器を近づけると周囲の10倍くらいの線量になります。

汚染水の漏えいにより、サイト内で働く作業員は更に大量の被曝を強いられています。実際に汚染水を浴びる事故も起きています。雨が降る度にタンクの堰の汚染水が外洋につながる側溝に流れ込んでいて海にも流れています。

私は改めて原発事故の過酷さを知りました。息子はチェルノブイリ事故の4日後に生まれました。その時に受けた衝撃を思い出しました。食べるものにも気を使い、当時出版された原発に関する本を読みあさり、息子が1歳9ヶ月の時に高木仁三郎さんの「反原発語り手養成講座」を受講したのです。高木さんが繰り返し語っていた「事故は日本でも起こりうる」が現実になったのです。未来の子どもたちの幸せのために、原発はいらぬ。そのためには市民運動の仲間を増やさなくてはと思いました。



伊藤久次郎さんは山岳会の仲間で読者です。素晴らしい版面ですねご本人の了解を得て掲載しました

オンネトーから見る雌阿寒岳と阿寒富士（北九州市の伊藤久次郎さんの版画）

## みな子の山旅日記

登山は昨年10月の下北半島の縫道石山以来になりますが1月3日、旭ヶ丘記念公園側から藻岩山に登りました。

今年の初登山です。

### 藻岩山531m（旭山記念公園登山口コース）



旭山記念公園前をスノーシューで9時50分出発。メンバーは5人です。多くの登山者の踏み跡を忠

撮影：岡田秀二さん  
小林峠からの藻岩山（後方）

実に進みます。小泉峠分岐までは、急勾配が続きます。藻岩山ってこんなきつかったかしら？と思いつつ11時10分に小泉峠分岐に着きました。ここからの眺望が素晴らしい。眼下に札幌市街が広がり、後方には藻岩山も見えます。つづら折りの狭い道を下り11時30分、慈恵会ルート分岐に到着。

ここでアイゼンに履き替え、急登をたどり藻岩山に向かいました。12時30分藻岩山に到着。札幌市民に愛されている藻岩山は、多くの登山者で賑わっていました。

慈恵会病院側から登る登山者が多いですが、途中からの眺望は旭山記念公園からのコースがお勧めです。

天候にも恵まれ、運動不足を解消でき、楽しい山行でした。

### 雪崩講習会を受けましょう

冬山を安全に楽しむために雪崩講習会を日本山岳会も独自に開いています。7年前の雪崩事故で仲間4人を失って、雪崩の知識を学ぶことの大切さを学びました。

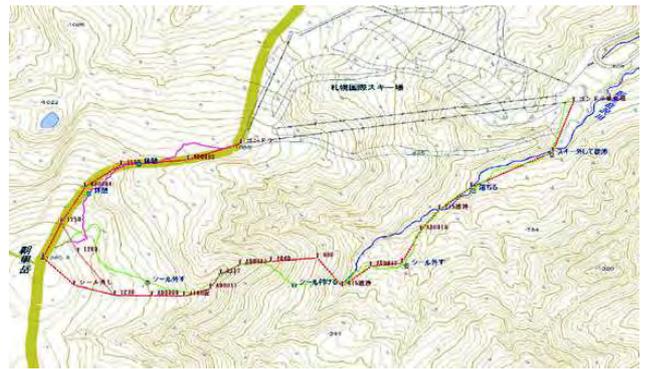
私も雪崩研究会で4年間学び、力不足ですが講師の役割を担っています。

2月1日～2日、机上講習会と実地講習会が札幌市内で開かれました。左写真は、救助の仕方を学ぶコンパニオンレスキューです。私も今年は救命講習を消防署で受けたいと思っています。

冬山に入るときは3種の神器、ビーコン、プローブ、スコップをお忘れなく装備しましょう。



### 下山は難所だらけの朝里岳（1280.8m）東尾根ルート



ホワイトアウトの中を進む

1月28日、札幌国際スキー場に9時集合し、ゴンドラで1099mの終点まで行き、10時スキー（シール）で朝里岳に向かって山岳会のメンバー19人で登り始めました。間もなく視界は悪くなり、前の人を見失わないように進みます。

私は今年初の山スキー登山です。体力が心配でしたが、グループごとに行動し、なんとかホワイトアウトの頂上付近に11時到着。

しかし、本当に怖かったのは下山でした。天候も悪いため、シールをつけたままで滑り降りました。スキーの下手な私には丁度良かったです。途中、風の当たらない場所で昼食とし、シールを外しました。新雪ですが、パウダーとは言えず、スキーが埋まるほどの深雪。私も数回転びました。そのたびに起き上がるのに悪戦苦闘。体力を消耗します。

一番怖かったのは715m地点の渡渉です。細いスノーブリッジを静かに滑り落ちないように渡るの、息を詰めて。なんとか無事にクリア

しました。メンバーの一人が落ちて、怪我はありませんでしたが全員が渡りきるのに時間を要しました。

なんとか無事にグレンデに出て、快適に滑降を楽しみました。14時下山。



撮影：2枚とも鈴木貞信さん  
滑降を楽しむ私です

# Books



## 『サークル村』と 森崎和江

水溜真由美著 ナカニシヤ出版  
3800円＋税

水溜さんは日本近現代思想史を研究されている北大の先生です。水溜

さんとは沖縄パネル展の実行委員会で出会いました。

新聞記事で「労働者の連帯の道探る」と本書の紹介があり、普段読む機会がないけど読んでみようかと400ページにも及び分厚い著書に挑戦しました。

本書は炭鉱労働者のサークル活動、「サークル村」の運動と思想、森崎和江における「交流」の思想の3部構成です。

1950年代、筑豊の炭鉱から各地に広がったサークル活動。労働組合運動と重なりつつ、うたごえ運動、文学、演劇、美術などの文化活動を労働者が次々と生み出した時代が、水溜さんの45人の聞き取りや、各地のサークル誌を通して生き生きと伝わってきます。

北炭夕張炭鉱のサークル誌「群鴉（ぐんあ）」の紹介があります。巻頭に「飾毛を持たぬヘアリズムよ/そは、生活の衣である/陽に映える、玉虫の輝きよ/そは生活の心である/群れて喧しき叫びよ/そは、生活の戦いである」が掲げられていて、炭鉱労働者の厳しい生活の中で、書くことで仲間と連帯し、明日へのエネルギーに変えていた姿が彷彿とします。

私は夕張炭鉱がまだ活気のあった1960年代、夕張で中2から高3まで過ごしました。生徒のほとんどが炭鉱員の子もたちでした。社員、下請け、臨時と格差社会でしたが、隣近所助け合って暮らす温かさがありました。書く事が好きだった私は、新聞部で活動しました。「炭鉱事故は何故起こる」という特集記事を書くため、炭鉱マンを取材したことがあります。過酷な労働が語られ、命がけの危険な作業であることを伝えたことを本書から思い出しました。

今の時代、正規社員と非正規社員、大企業と零細企業、地域による格差はむしろ50年代よりも広がっているように思います。若者の3分の1が110万以下の年収で貧困だといえます。社員もブラック企業では過酷な労働環境で心身をすり減らして働いています。

働く意欲につながるような文化活動は、今の時代にこそ求められているように思います。水溜さんはあとがきで「21世紀を生きる私たちにとって、労働者をつなぐ回路がどのようなものでありうるかを考えるためにも、1950年代の運動から学ぶものがあると信じている」と結んでいます。

本書からかつての労働運動の活気と人間関係の豊かさが立ち上がってくるような感動を覚えました。3部では女性の立場から運動に加わった森崎和江さんの目で「サークル村」の意義を問い直しています。1950年代、まだまだ女性が市民運動に参加することさえ厳しい時代にジェンダー差別に果敢に異議を唱えた姿が圧巻です。

## ノボさん 小説 正岡子規と 夏目漱石

伊集院静著 講談社 1600円＋税



本の扉に「子規は夢の中を走り続けた人である。これほど人々に愛され、これほど人々を愛した人は他に類をみない。彼の

こころの空はまことに気高く澄んでいた。子規は今も私たち日本人の青空を疾走している」。

好きなベースボールへの情熱、生命をかけて追求する文学、俳句の世界、純粹でまっすぐなノボさんこと正岡子規の姿が、生き生きと描かれていて、面白くて一気に読みました。

明治の文豪として誰もが知っている夏目漱石。その影になりがちな正岡子規が、誰からも愛された人だったことが、本文から伝わってきます。

導入部「ノボさん、ノボさん」と声をかけられる若者の姿。「どこに」と問われて「ベースボールの他流試合に出かけるんぞな」と答える若者こそ、21歳の子規の姿です。ベースボールと子規の組み合わせがなんともユーモラス。

子規は常に人々に囲まれ、友人、師、家族から愛され、子規もまた彼らとの交流を大事にしていました。東京大学予備門で運命的な出会いを果たしたのが、同じく日本の文学の礎となる金之助こと夏目漱石です。志をともにする子規と漱石は、人生を語り夢を語り、恋を語るのです。明治35年、子規の命が尽きる35歳まで、二人の友情は続きました。二人を軸に、夢の中を走り続けた人ノボさんの人生を描きます。

子規は東京の寄宿舍で喀血します。その時の俳句が 卯の花をめぐりてきたか時鳥 卯の花の散るまで泣くか子規（ほととぎす）です。この日から子規を名乗ることになるのです。長く生きられないと覚悟を決めながら、あくまでも明るく、俳諧史に取り組み、多くの俳句を残しました。

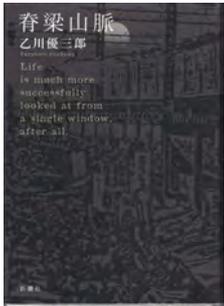
漱石は、ロンドンに留学しますが、その時には子規ともう二度と会うことはできないのではないかと覚悟します。何度もふたりの間では手紙が行き来したエピソードも心に残りました。

漱石が子規の死を知ったのはロンドンで、2ヶ月も後のことです。「手向くべき線香もなく暮れの秋」の句から、漱石の慟哭が聞こえてくるようで、私も思わず涙がこぼれました。

この本の魅力は、時代の風物を感じることができるともあります。寄席や食べ物、ベースボールなど好奇心旺盛な子規の一面も伝えています。

俳句革新運動において画期的業績を残した正岡子規。この本を読んで俳句が身近になりました。気難しいと評されている夏目漱石の豊かな人間性にも目を開かれました。

著者は最後に「ただ自分の信じるものに真っ直ぐと歩き続けていた正岡子規が何よりもまぶしい」と書きました。正岡子規への共感を本書のすみずみから感じられました。出色の本です。



## 脊梁山脈

乙川優三郎著 新潮社  
1700円＋税

戦後の1946年、中国から復員した23歳の矢田部信幸は、故郷へ向かう列車のなかで小椋康造に助けられます。

山に籠ってもう二度と町へは下りてこないつもりだと語る康造。「山から木材をもらって、静かに生きてゆきます。もし今度戦争があったら山の奥へ逃げるつもりです」の言葉に強い印象を受けた矢田部は、彼が山に籠る理由を知りたくて、自らも信州や東北の山村に分け入り木地師の系譜を調べ出します。奥深い山道を辿って、自分を取り戻そうとする冒険小説のようでもあります。

日本の山中には、かつて木地師という集団がありました。轆轤(ろくろ)を回して木でお椀(わん)やこけしを作り、良材を求めて山中を漂泊していた人たちです。国費留学生だった矢田部は、叔父の残した遺産で各地を旅して木地師の歴史を調べ、木地の文化を記録することによって、日本を見つめなおそうとします。やがて古代史の謎の世界にも踏みこむのですが、たくさんの人名が出てきて私には理解できませんでした。

著者が時代小説で名の知れた人ですので、歴史好きの読者には面白いかもしれません。

矢田部が木地師に、そして康造にこだわったのか。それは自分にとっての戦争が、木地師に戻った康造に会わぬかぎり終わらないからでした。戦争で失われた青春。奪われた生の実感を取り戻そうとするかのように矢田部は木地師の暮らしと仕事を調査し、記録していきます。

もう一つの柱は恋愛です。東京で居酒屋を営みながら画家を志す堀佳江は、性根をすえて戦後を生きる新しい時代の女性。一方、時代に合わせて変われない女性もいます。宮城県の弥治郎地区の木地師の娘小倉多希子は、三絃に秀で、温泉場の芸子になる古風でひかえめな女性です。対照的な2人に矢田部は心惹かれます。東京と東北、復興の日本で対極に生きるふたりの女性との出会いと別れが、悲しいけれど、何か清々しい。生き方は違うけれど、凜と立つたたずまいの美しさが目に浮かぶようでした。

脊梁山脈とはある地域を分断して、長く連なり主要な分水嶺となる山脈のこと。長い旅路を経て分水嶺を超えた矢田部が見た尊い光景が、私が見た北海道の中央分水嶺を歩いた光景と重なりました。

8年も前になりますが、18kg近いザックを背負って山岳会の仲間と登山道のない冬に中央分水嶺踏査をした日々が蘇りました。その光景を見た感動は私の生涯の宝物です。

本書は昨年、大佛次郎賞を受賞しました。乙川さんは「木地師の伝統や戦後の混乱期を生き抜いた先達の姿を通して、国と国、人と人のつながりよう、日本人として見直すべきものを提示した」と述べています。また「時代小説から現代小説へと、作家の分水嶺を超えた」と語ってもあります。

私たちの祖先は朝鮮とも繋がっていたことを知り、国と国とが争う戦争の虚しさを静かに伝えて余韻が残りました。

## 科学者が人間であること

中村桂子著 岩波新書 800円＋税

著者は3.11の震災と福島原発事故以来、現在の科学と科学者のありかたを自省しつつ批判的に問い直してきました。

科学者が一個の人間であることによって、できることがあるのではないかと。日常感覚と思想を持った、科学者が育つ社会づくりへの提言が本書です。

著者は理科系では特定分野の専門教育に徹する余り、自分の研究対象という狭い領域の外の世界と向き合う科学者を育てていない。社会という文脈の中で自然と向きあいつつ自然観・人間観を構築する、この科学本来の目的と役割が今やすっかり忘れ去られているのではないかと自戒をこめて語ります。専門のことは雄弁に語れても、市民生活と結んで一緒に行動しようという科学者は圧倒的に少ないです。

哲学者の大森荘蔵氏の「重ね描き」の考え方を著者は発展させようとしています。日常感覚から生み出される「略画的」世界像と、それを超えて科学が明らかにする「密画的」世界像を対等で相補的なものとして受け入れる立場をさします。これでは分かりにくいですね。略画的とは「チョウが花から花へと飛び回る姿を楽しみ、菜の花に卵を産む様子を観察する場合」と説明しています。密画的とは「可能な限り最小の単位まで還元し、分析的に物を見ていく方法」としています。この「重ね描き」を生命科学者としての経験をもとに発展させ、具体的に実践する道を模索し提案したいという立場で語っています。

「エネルギーも生命も、明確な思想と先見性ある提案はなされながら、それが大きな流れをつくり、世界に向けて発信され、普遍性のある文明につながっていくことができないままにここまで来てしまったこと。科学者、科学技術者に人間として生活に根ざした眼があれば社会につながっていくことにもっと力を注いだはずだと思う」と述べています。

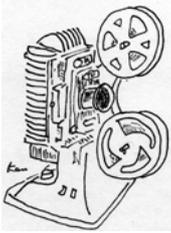
著者は宮沢賢治や南方熊楠の「重ね書き」の実践に学ぶべきだと提言します。

賢治が童話を通じて語る自然観が、今とても大事だと私も思います。本書では私たちにもなじみが深い「虔十公園林」を取り上げています。内容は、周囲の人たちから少し足りないと思われる虔十が、生き物や雨や風から多くを感じとることができる人で、後の時代の子もたちに優れた贈り物を残したという話です。

賢治は、農民と共に生きようと実践した人でした。

科学者の役割は、市民に学びながら、共に歩むことではないでしょうか？人間として生きることは当然の事として、科学者が知り得た知識を市民と共有し、社会に還元して欲しいと思います。





## きっと、うまくいく

インド  
ラジクマール・ヒラニ監督



真の友情や幸せな生き方や競争社会への風刺をコメディタッチで描きます。入学したインドのエリート大学で友人たちと青春を謳歌し

ていたランチョーが突然姿を消した謎と理由を10年という年月を交錯させながら解き明かしていきます。

若きエリート候補たちの通う工科大学で、動物好きなファルハーンと極貧家庭育ちのラジューは、破天荒で陽気なランチョーと意気投合します。ギャグも満載で抱腹絶倒。

高度成長期にある現代インドの勢いと同時に、そこに潜む問題もしっかりと描いています。競争社会では勝つことだけが大事だと主張する鬼学長は、過熱する学歴競争の虚しさを体現する存在なのです。さらに、鬼学長の娘とランチョーのラブストーリーがあり、ミュージカル・シーンが楽しくステキ！

その10年後、親友ふたりが姿を消したランチョーの謎を追うというサブストーリーが同時進行します。ロードムービーという要素まで加わり、ラストの爽快さに思わず拍手！

ハリウッド映画の大スター、アーミル・カーンが主役ランチョーを演じ、ヒロイン役のカリーナー・カプールが美しい。

3人の友情もシンプルで、日本映画ではこうはいかないよなと、なんだか昔の少年の姿を見ているようで懐かしかったです。閉塞感の漂う今の日本社会。この映画は、言うべきことをスカッと語っていて爽快でした。

映画好きの友人から勧められて、新年の2日に観ました。もしビデオになっていたら是非ご覧ください。

## かぐや姫の物語

高畑勲監督

初めて見る虫や草に目を輝かせる姫の仕草の愛らしさ。水彩画を思わせる透明感のある自然描写も美しく、こんなアニメは見たことがなかったので、その斬新さに目を奪われました。

山里の四季の描写が本当に美しい。自然を離れては人間は生きていけないという思いが、画面に躍動します。

しかし、かぐや姫の気持ちを読み間違えた翁によって、都で贅沢で、華やかな生活を強いられます。欲を捨てては生きられない哀しい人間の性（さが）にかぐや姫は絶望します。生気を失っていくかぐや姫をスケッチのような手法で描きます。

命を輝かせる生き方はお金では買えないことを無言



で訴えます。その業とともに決して忘れないでしょう。

わらべうたもいいです。まわれまわれまわれよ水車まわれ/まわって お日さん 呼んでこい/まわって お日さん 呼んでこい/鳥 虫 けもの 草 木 花/咲いて 実って 散ったとて/生まれて 育てて 死んだとて/風が吹き 雨が降り 水車まわり/せんぐり いのちが よみがえる/せんぐり いのちが よみがえる

人間社会の、素晴らしさも愚かしさも見たかぐや姫。それでもこの世界は素晴らしいという監督の思いが詰まったアニメでした。

## いのちを楽しむー容子とがんの2年間ー

取材・構成：松原明・佐々木有美

40歳で乳がんを発症し、手術や抗がん剤治療を選択せずに58歳で他界した女性、渡辺容子さんの最期の2年間



をみつめたドキュメンタリー。

主治医は「患者よがんと闘うな」の著者である近藤誠さん。病気を見つけたのも、本を読んでがんの治療を学び、主治医を決めたのも容子さん本人でした。体に負担のかかる治療をせず、がんをそのまま受け入れ、旅を楽しみ、庭の絵を描き、反原発のデモにも出かける容子さん。自分の頭で考えて選択し行動してきた容子さんの生き方が潔くて、自分らしく生きるって素敵だなと感動しました。

従姉妹は20年前、胃がんの末期で50歳で亡くなりました。緩和治療のことを知っていたらあんなに苦しまなくて済んだのではと残念でなりません。容子さんは体調のいい時も悪い時も、いつも友人やご近所の方たちが側にいました。従姉妹は、抗がん剤治療で、髪の毛が抜け、苦しみ、その姿を見られるのが嫌で家族以外の面会を拒否しました。福島県のいわき市に住んでいて、私が子どもの頃、いつも良く響く声で歌を歌っていた従姉妹の姿をこの映画を観ながら思い出していました。

骨転移の痛みから神経ブロック治療のためにホスピスへの入院も考え始めます。車で1時間かけて何度も往診された網野先生の温かさが印象に残りました。網野先生は、脳梗塞の後遺症があるにも関わらず、点滴する場面がありました。親身に考え、最善の方法を見出そうとする姿勢がにじみ出て、感銘しました。容子さんは、たくさんの人たちに支えられた様子がどの場面にもありました。

山を愛し、書くことが好きだった容子さんと私の共通点もありました。若い時に登山で鍛えた体力と気力が、がんと闘う上で役立ったのではと思うのです。

自分の命を人任せにしないで、医療についても納得いくまで調べて自分らしい生き方を貫いた人生でした。

容子さんの自然な笑顔が素敵で、がんへの怖れが和らぎました。

## タイピスト！

フランス レジス・ロワンサル監督



1950年代のフランスを舞台に、タイプライター早打ちの世界大会に挑むヒロインの奮闘と恋を描いたサクセスストーリーです。

秘書に憧れて田舎から出てきたローズ（デボア・フランソワ）が、保険会社のルイ（ロマン・デュリス）の秘書になりますが、うまくいきません。しかし、ルイはローズのタイプライターの才能を見だします。ルイをコーチにタイプ早打ちの世界大会を目指すことになりま。

二人三脚での特訓が始まります。ジョギング、滑らかにタイピングできるようピアノの特訓、難解な文学書のタイプなど。

ふたりの間にほのかな恋心が生まれますが・・・。

タイプに自信をつけたローズが、教養も身につけて日を追うごとに素敵に変身していきます。

50年代のファッションや調度品が素敵でさすがフランスです。

友人から招待券を頂き「大雪でどうしよう」と迷っていましたが観て良かったです。激戦が展開するタイプ早打ちシーンに目が釘付けになりました。何より、ハッピーエンドで、「人生いいこともたくさんあるよ」と元気をもらえた映画でした。

## ゼロ・グラビティ

米 アルフォンソ・キュアロン監督



広大な宇宙に人間が放り出されると聞くだけで、二の足を踏みますが、どうやって生還するのか知りたいという気持ちが勝って観た映画です。

宇宙空間の怖さが静かに伝わってきます。宇宙飛行士の肉体が、浮遊と漂流をつづけるうち、寂寥と絶望を滲ませていきます。あたかも、私もその場に遭遇しているかのような心細さを覚えました。宇宙空間の描写が 特撮とは思えないほどリアルでした。

二人で行動していたのに、ベテラン宇宙飛行士のマッドは、命綱を切って女性飛行士（サンドラ・ブロック）を地球に生還させようとします。

地球に生きて帰ることを決意させたのは亡き娘だったのかもしれませんが。全力を尽くして地球に向かっていく姿には、母の強さがにじみ出ていました。

札幌教授学研究会の会で30年以上学んできた夫が2013年の年末に富士河口湖のホテルで開かれた教授学研究会（斎藤喜博さん提唱）に参加しました。その会報に寄せた文章です。

## 実践交流会に参加して 樋口澄生

現在、中学校の2年生の副担任をしていますがその副担任という目で生徒を観ていて、時々思うことがあります。それは成績が良いとか悪いとかということと、その生徒の持っている人間性ということと、あまり関係がないということです。

ある生徒は、確かに理科の成績が振るいませんがいつも柔和な明るさを湛えています。職員室に画用紙をもらいにきたとき、私と二言三言会話をしているとき、側にいた校長先生もその会話に思わず加わって、楽しい一時が流れました。また、ある生徒もほんとに点は取れない生徒なのですが、剣道部で鍛えた大柄な身体に何か飄々とした雰囲気を持っています。

いろいろな生徒がいて、授業中ではなかなか観ることができない人間性というようにところに触れていられるとき、こちらも何か楽しい気持ちでいられる、そんなことがよくあります。ですから掃除当番とか行事のとりくみで集まったときなどは、生徒の普段の姿に触れるので大切な時間です。

交流会の3日目、美術の作品の講評で、相地先生が「これらの作品を見てどの生徒が劣っているとか、そうでないと言えるでしょうか。」と斎藤喜博先生の言葉を語られていました。

授業のなかで、課題にむかって子供たちと教師が力を尽くしていく、そういう営みの狭間に、その子供たちが持っている人間性、あるいは伸びようとする子供たちのすがすがしさといったものに触れることができるということ、これは教師の仕事の楽しさであることを、再確認できました。そのことを確かめることができた、授業を創造された先生方の努力に感謝します。

私も、もうあまり時間がなくなりました。3学期の教材研究を進めて本来的な教師の仕事を全うしたいと思います。

教材研究という点で、福住さんの報告に大変励ましを得ました。酸とアルカリの授業ですが、化学結合の広い世界を精力的に学び、授業に臨む姿勢が素晴らしいと思いました。（中略）昨年、全く授業にのってこれなかった生徒が、きちんとノートを取っているということ。福住さんの真剣さが伝わっているということです。やはり、教材研究から出発しなくてはならないのだということがよくわかりました。

また、箱石先生が度々指摘されていたリズムということや、全体の構成を考えるということ。こういうことは表現という活動に限定されるものではなく、授業をつくる上での基本である、ということも大切な言葉として受け止めました。

長い間、参加できずにおりましたが、3日間学んで良かったと感謝の気持ちでいっぱいです。

（札幌市立美香保中学校）

小杉和樹さんは利尻町に生まれ育ち、生粋の利尻っ子です。現在も利尻町職員の傍ら利尻島自然情報センターを主宰して、利尻にかかわる自然、野鳥、利尻山、観光情報を提供する一方、子供たちなど集めて野鳥観察会などを実践するナチュラルリスト。日本野鳥の会・道北支部支部長です。今回、風力発電に対する意見を道北地方において風力発電事業に関わる事業者、アセス担当社、電力会社、風車所在市町村、その他関係諸機関等へ日本野鳥の会道北支部など10支部連名で意見書を提出しました。その一部分を小杉さんの了解を得て掲載します。(読者のおひとりです)

反原発の運動と自然保護運動と横断的な連帯ができませんでしょうか？小杉さんは原発に反対の立場です。

## 北海道北部における風力発電の設置及び計画に関しての一文

現在、北海道北部の道北地方(宗谷総合振興局・留萌振興局管内に相当)には、留萌市、小平町、苫前町、遠別町、天塩町、幌延町、稚内市、浜頓別町、猿払村、利尻町にあわせて10市町村27カ所、約172基の風力発電用風車が設置されています。(2012年3月NEDO調)

北海道全体の設置数が、約330基前後と言われる中、面積では北海道の1割にも満たない道北地方に北海道の風車が6割も集中していることとなります。更に北海道全体で風車1基当たりが占める面積は278km<sup>2</sup>ですが、道北地方では1基当たり47km<sup>2</sup>と6倍以上にもなります。道北地方に次いで風車設置数の多い道南地方(渡島総合振興局・檜山振興局管内に相当)では49基で1基当たり134km<sup>2</sup>になっています。

とりわけ、稚内市の宗谷丘陵には国内最大と言われる57基の風車が立ち、こうした状況を「道北地方は風力発電、再生可能エネルギーのメッカ」と言うのも間違っていないのかもしれませんが。(中略)数年後には道北地方に220基以上の風車が立ち並ぶこととなります。更に、近い将来に向けて稚内市から増毛町にかけてのオロロンラインに150基~300基程度の風車を建設するべく計画が進められています。(中略)

日本野鳥の会道北支部は、道北地方の野鳥愛好家や自然愛好家が組織する小さな団体です。道北の地に、共に暮らす野鳥たちを見ることが何よりも好きで、渡り鳥に季節の移ろいを見聞きし、環境の豊かさを得心しこの地に生き切ることには喜びを見いだしています。しかし、野鳥たちの生態や生息環境を熟知しているわけなどなく、風車が大なり小なり野鳥たちに影響することを推測出来る程度です。勿論、人類自体も現時点で知り得ていることは極僅かなことだと思ふとき、わたしたちは、どれだけ野鳥たちの声を代弁出来ているのでしょうか。いいえ、やはり人の立場でしか言えないのが現実ではないのでしょうか。

この道北地方に220基を超える数の風車が立つなら野鳥たちはその間隙をすり抜けるようにして生きて行かなければならないような気がします。(中略)そうして、近い将来、陸上だけではなく洋上にも風車の立つ時が来るでしょう。危険度は増すばかりです。一生懸命に子育てを終えて南下し、幾多の困難を乗り越えて北上する野鳥たちに、試練はいくらあったら良いのでしょうか。野生に安寧など無いことは知りながら

せめてこの道北地方が安寧の地になればと願うだけです。(中略)

日本野鳥の会道北支部としては、道北の地にこれ以上の風車が立つことが無いよう切に祈るとともにせつかく拡散分布が成功したタンチョウや未だ生息状況が判明していないワシミズクに被害が及ばないことを願うばかりです。 2013年12月9日

注：本文の数字は北海道全体と道北地方の風車設置数と密度の違いを示したものです。全文をご覧になりたい方は小杉和樹さん kazuki@h2.dion.ne.jpにご連絡してください。



版画：北九州市の伊藤久次郎さん

日本三百名山：福岡県と佐賀県の県境にある脊振山(せふりさん・1055m)

## 沖縄パネル展のお知らせ



「軍隊は女性を守らない～沖縄の日本軍慰安所と米軍の性暴力」

沖縄に日本軍慰安所があったことをご存知ですか？

沖縄に配備された日本軍は、部隊が駐屯した各地130箇所に慰安所を作ったことが明らかにされています。被害者の証言も含めて展示します。

日時：2.19(水)~23(日)10:00~20:00  
(最終日は18:00まで) チケットは500円です  
会場：北海道クリスチャンセンター・ホール(札幌市北区北7西6) チケットは樋口も扱っています。  
講演会：2.22(土)13:30~同会場  
高里鈴代さん「沖縄戦と日本軍『慰安婦』そして米軍駐留と女性への暴力」  
講演会は、チケットの半券を持っている方は500円で当日払いです。講演会だけの方は600円になります。

購読料をありがとうございます(敬称略)

2013.12.16~2014.2.5

但馬桂子(江別市)カンパも坂井恒俊・京子(旭川市)林心平・恭子(札幌市)富森保枝(室蘭市)菅沼宏之(札幌市)伊藤泰弘(札幌市)佐々木純一(雨竜町)亀田法子(江別市)カンパも 竹田とし子(函館市)12号分 大久保フヨ(北広島市)切手70枚 合計18,000円は印刷と送料に使わせていただきます。ありがとうございます

4月から郵便料金が値上げします。郵送希望の方は6号分1,000円の振込にご協力をお願いします。

郵便振替「銀河通信」02740-7-56535